



# 中高生とともに差別と闘う

## 可能性をさらに

吉成タダシ (うずしおランチ代表)



### 「人権」という軸

五月のある日、今春大学を卒業した教え子のミコトが帰省するというので、一緒に夕食でもという話になり、行ってきました。といっても、帰ってきたのはその日の午後三時で、戻っていったのは午後九時の高速バスでしたから、ただか六時間ほどの帰省ということになります。そのうちの三時間を夕食につき合わせたわけですから、申し訳ないことをしたなあ、あとになって思いました。

教え子といっても、私は彼女のいた学校で勤めていたわけではありません。では、どこの教え子なのか。人権を語り合う中学生交流集会です。彼女は中一からずっと、中学生集會に参加していました。そのなかでも彼女は特にインパクトの強い子でした。明るく元気で物怖じすることなく、自分の思いを考えながら、詰まりながら、それでも一生懸命に話すことのできる子でした。特にダウン症の弟のことについては、「天使」と表現し、いつも笑顔で語ってくれました。

彼女は中学を卒業して高校生になつてからも中学生集會にかかわり、その後関西の芸術系大学に進学したのですが、その間も忙しい合間を縫って、かかわり続けてくれました。つまり、彼女の芯の部分に、揺るぎない「人権」という軸がどっしりと根づいていたということなのです。

大学を卒業してから、今はどこで何をしているのか、生ビートルを片

手に訊いてみました。すると今の仕事場は、東京赤坂にあるACTシアター。舞台「ハリー・ポッターと呪いの子」の演出助手をしているというのです。

驚きました。大卒すぐで、しかもそんなところに、どうやって?

こちらの驚きをよそに、彼女は四月からの二か月間にあつた出来事や出会い、学びを、本当に生き生きと、はじけるように語ってきます。映画にはない、生の舞台の臨場感。同じ演目なのに、一回一回すべて違う舞台芸術の世界。今まで遠い存在だった役者さんとの学び合い。石丸幹二さんや藤木直人さん、翌日は向井理さんとお仕事をすると。六月からは藤原竜也さんとお仕事をすることも言っていました。

私も映画や演劇には関心があり、中学生と映画を制作したり、人権劇に取り組んだりしてきたので、彼女の話は本当に興味深く、心躍らせて聞くことができました。にしても、どうやってそんなところに?です。

### 面接が「語り合いの場」に

訊いてみました。一応就活で内定しているところがあつたところに、大学の先生から、「受けてみませんか?」という声がかつたと。一次審査は面接。そこで、面接官である劇団の方と意気投合。面接で意気投合というのもおかしな話ですが。その日そのまま、その日にある舞台を観て帰らないかと、面

接官から声がかつたとか。その後、二次審査、三次審査が予定されていたはずが、三次審査がなくなって二次審査で終了。そして、採用。どんな舞台裏があつたのかは分かりませんが、そんないきさつがあつて、働けるようになったと言います。

でも私には、面接の場面が想像できません。おそらくきつと、彼女にとつて面接の場は、「語り合いの場」になつていたのだと思います。そのことを、ずっとずっと十年間、私たちは問い続けてきたのですから。それが自分の血となり肉となり、骨となつていっているのですから。それで語り合うという行為が出ないわけがありません。その熱が相手に伝わり、相手の熱が増幅されて自分に伝わり、それをまた返し。その繰り返しを積み重ねていけば、「あ、この人と仕事をしてみたい」と思えるのだと思います。そんな「熱」が、相手に伝わった結果のよりに思えます。

### 可能性をさらに

先日、あとで紹介させていたたく「人権こども塾」に、教え子二人に来てもらい、話してもらいました。一人は、介護にかかわって仕事をしているレイコ。もう一人は、ドクターヘリに乗って仕事をしているフライントナースのエツコ。レイコは、ミャンマーから研修生として介護実習に来日している方の話をしてくれました。内戦で帰国できず、家族と会えないなか

働いている研修生にとことんかわつている話。この話のあとも、その方に付き添って、試験会場である大阪まで行く。

エツコからは、とにかく眼の前の救える命を救いたい思いで、十三歳になつてフライントナースになる覚悟をした話をしてくれました。映画やドラマのようにうまくはいかないこともあるけど、教訓を生かしながら、苦悩しながら、現場の最前線に立ち続けると。

私の人権教育・同和教育は、二人の彼女らからスタートしたといつても過言ではありません。私の原点です。その原点となる子たちが、時を隔ててもなお、当時の熱い思いのまま、今を生き、そしてさらに進むうとしていいる姿を見ると、この教育の持つ可能性って何なんだろうと思わずにはいられません。

先に述べたミコトもそうですが、様々な差別問題・社会問題に関心をもち、何がおかしいのだろうという感性を磨き、相手の思いを誠実に受けとめつつ、自分の思いもちゃんと表現し、人とのつながりを大切にしようとする揺るぎない姿に、人権教育の可能性を感じずにはいられません。

そんな子たちをさらに育んでいこうと、人権こども塾をはじめました。次号から紹介したいと思えます。

なお、お芝居に興味のある方は、ACTシアター、ハリー・ポッターの世界へどうぞ。